

Title	ティンペミンとキッサン文学
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学学報. 52 p.81-p.94
Issue Date	1981-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80833">https://hdl.handle.net/11094/80833</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## テインペーミンとキッサン文学

南 田 み ど り

### Thein Pe Myint and Hkit San Sapay

Midori Minamida

Hkit San Sapay is well known as its simple colloquial style in the history of modern Burmese literature. When Hkit San Sapay was first published in 1933, Thein Pe Myint's first novel 'Kin Myo Chit' was also published. As a student of Rangoon University, Thein Pe Myint was the contemporary with Hkit San writers. But he drew a line between Hkit San writers and him.

His article written about Burmese literature in 1937 and 1947 didn't refer to Hkit San Sapay. In 1949 he referred to it for the first time. He prescribed some Hkit San writers as those of mere description literature and criticized that they should not describe merely troubles of poor people. He insisted that they should give the reasons and the way of solution of the troubles and also insisted that they should be more radical.

This kind of his criticism was made only in 1949. Although he precisely clarified in 1974 the situation of Hkit San Sapay in the history of modern Burmese literature, he didn't refer to what he criticized in 1949 at all.

The reason can be found in his short novels written after 1950. In a word he himself failed to find the reason and the solution of the troubles of the poor people. In the colonial period, he regarded the reason of the troubles as the colonial system and the way of solution was considered by him to liberate them from the system. Just after the independence of Burma, the solution of the trouble was thought to restore the unity of the left wings. He could appeal his opinion effectively through his novels. But after the failure to restore the unity he could no longer find the way of solution of the troubles.

Gradually his numbers of novels reduced and his content of novels changed a lot since 1950. First, in the series of short stories whose hero is a lawyer he described the process of separation of the intellectual class from the people. For him 'basic human feeling' became more important than the social or political matters. And then, secondly he described the delusion of an old teacher and middle aged civil servants. Thirdly, especially two or three years before his death,

he wrote novels similar to essay. They are divided into two types. One is about his home and families and the other about the providence of the nature. It is very ironical that these novels have become very similar to Hkit San Sapay in some sense.

1

ビルマ独立後の混迷期を境とするテインペーミンの小説の、内容形式両面における変化の背景に、その政治的立場の変化とそれに基づく文学観の変化があることは、既に指摘した。<sup>1)</sup>ここでは、テインペーミンのキッサン文学観を、最近入手した晩年の小説集<sup>2)</sup>を中心とする作品群とかわらせて検討を試みたい。

1930年代のビルマでは、独立運動のみならず、文学にも質的転換が訪れた。口語的散文体により現実社会の諸相を表現する小説形式が定着し、優位に立ったのである。そこに「キッサン文学」の果たした役割も、小さくはない。キッサン作家達とほぼ同世代のテインペーミンは、キッサン文学を意識の隅に置きつつも一線を画し、独自の方向を目指した。テインペーミンのキッサン文学観は時代と共に変化し、その晩年には一定の結論を見た。キッサン文学には詩と短編小説があるが、ここでは短編小説を主な対象として、テインペーミンのキッサン観の変遷をたどっていく。

ビルマ文学辞典によれば、キッサン文学は「1930年代、ラングーン大学内の一部作家が書いた小説、エッセイ、批評、詩に与えられた文学形式の呼称」<sup>3)</sup>である。ラングーン大学教授ウペーマウンティンが、1933年に短編集「キッサン小説集」を、翌34年に「キッサン詩集」を監修、出版し、そこで初めて「キッサン」なる語が使用された。序文でウペーマウンティンは、キッサンとは時代(Hkit)を調べる(San)ことであると述べ、収録作品のみが文学界で最新最良であるとの意図はなく、気心の知れた弟子の作品から良いものを選んだにすぎないことを明らかにした。作品に共通するのは、平易で明快な用語、文体ならびに、日常的題材が使用される点である。これらは若手作家の多くに歓迎され、僧侶を中心とした学識を誇る作家達からは、ビルマ的でない、ビルマ語が稚拙であると反撥された。公用語である英語で講義を受け、英文学の影響下にある学生達は、ビルマ語の運用において古典文学に堪能な僧侶達に及ぶべくもなかったからである。ジャーナリズムは賛否両論に賑わい、キッサン文学は否応なしに論争の渦中に巻き込まれていく。これらの論争は、それ以前から存在した文学の新旧勢力の相克の延長でもあった。

植民地化以前、古典文学の主流は形式的には韻文であり、内容的には本生譚や仏伝等パーリー文学を典拠としていた。表現は比喩、象徴、踏韻、語呂合わせ等が好まれ、婉曲であった。社会の急速な流れは、現実の直接的表現に有効な手段である散文小説を文学界に登場させた。英文学を中心とする外国小説の翻訳翻案を起点とし、ビルマ文学は近代化への脱皮を始める。だが、散文小説が文学上の一ジャンルとして認められるには、尚数十年を要した。文体面もさることな

がら、小説が青少年の精神育成上有害であるという僧侶達からの攻撃が、1930年代半ば迄幾度となく起こったからである。「長文が良いか。短文が良いか。たっぷりとした語で豊かに描くのが良いか。僅かな語で適切に描くのが良いか。婉曲に描くのが良いか。直接的に描くのが良いか。壮大な事柄を描くのが良いか。細かな事柄を描くのがよいか。仏陀の説法、本生譚、王朝史、仏伝等を元に描けば立派な文学になるのか。日常的に起こっている普通の事柄、日常生活の中の誰彼の体験等を描けば立派な文学になり得ないのか。パーリー文学を基礎としたビルマ文学から、英文学を基礎としたビルマ文学へ変わってゆくべきではないのか。」<sup>4)</sup>等の点に基づく新旧両世代の作家の対立は1930年代に入り激化した。

1930年のビルマは、世界恐慌の波及による農民の急速な没落、反英農民一揆タヤワディの乱の挫折、ランゲーンの反インド人暴動、独立運動の母体となるドウバマーアシアヨン（タキン党）の結成等に揺れた。これらの激動は、ビルマ文学において古典的文体の影響を断ち切って口語的散文体が優位に立つ契起を与えた。

テインパーミンは作家を志望した時、自己の主張をできるだけ多くの人々に理解させる最も有効な表現形式として散文小説を書くことを目指した。奇しくも「キッサン小説集」が出版された1933年、彼はランゲーン大学在学の学生作家として短編小説「愛国者キン」でスタートを切った。キッサン作家達の近くにあり、一部にはキッサン作家と称されながらも、彼はキッサン作家と積極的な交わりを持たなかった。彼は独立運動に参加する政治的学生、いわゆるキッサン作家達は、大学を優秀な成績で卒業し、学者や高級官僚となってゆくエリートと、双方の立場が相違したからである。

## 2

1937年、論文「昔の反骨作家達」で、彼はまず、当時の文学が既にパーリー文学の影響を脱し、独創性に富むようになった反面、娯楽的傾向が増大し、中流好みの登場人物が多いことを指摘した。次に、文学の評価基準を、独立に有益であること、農民、貧乏人の利益となることに置き、文学者の課題を、多数者である貧しい人々を正しく描くこと、一匹狼や傍観者とならず、しかるべき組織に入って闘う進歩的作家となることとした。「進歩的文学を書くなら、ビルマ人民を抑圧する者を粉碎すること、仏教の名を悪用し、騙して飲食する者共に恥を知らせること、思慮のない恋愛、肉欲、世を驚かす事件、読むに耐えない起こり得ない出来事を望み、残存させる文学、奴隷根性を生じさせる文学を避けること、人民である農民、貧民を正しく描くこと、彼等に英知が生じるよう導いてやることを‘進歩的作家’は忘れるべきでない。」<sup>5)</sup>彼にとって当時排斥すべき主な対象は、娯楽的恋愛小説、怪奇小説の類であった。キッサン文学をそれら文学一般から区別し、その意義を考慮する必要性は、彼の念頭に生じていなかった。

1947年、「今日のビルマ文学と作家の問題点ならびに任務を明確に定めるため、論議を開始する」<sup>6)</sup>ことを目的に書かれた「時代を逆行させる作家達」で、テインパーミンは、植民地時代か

ら終戦直後に至るビルマ文学の動向を具体的に分析する。そして、労働者、農民、都市在住勤労者、貧民達の階級の立場から、変革と革命の先頭に立って書く作家ならびに進歩的作品がまだ少ないと主張する。それらの中にもキッサン作家の名はない。

この時期に、文学に階級性を取り入れることを主張する若手作家と、芸術性のみを重視する長老作家の間に論争が起こった。1930年代後半に、散文小説が文学界における地歩を固めた後、独立闘争の体験を経て、文学における階級性の問題がビルマ文学界の関心事となったのである。1949年、それらの論争を更に煮つめることを促した「今日の人民文学の諸問題」で、テインパーミンは初めて、一部キッサン作家を具体的に論評した。彼はビルマ文学を、反動文学、新ブルジョア文学、写実文学、人民文学の4種に分類し、新ブルジョア文学の一部を巻き込み、写実文学と人民文学の団結を基礎とした人民文学統一戦線を結成し、互いに争うよりも協力して一握りの敵を打倒し、英米帝国主義の影響濃い文学を粉砕し、国民の立場で行動する知識人を育て、社会主義ビルマ建設の一翼を担うことを提案した。

この写実文学の中に、キッサン作家のゾージーとミントゥウンが含まれている。テインパーミンは写実文学を、国民大衆の生活や感慨を見聞通りに描くもので「上流階層とインテリ達の為に滑稽な人民をからかい半分で描く敵性文学とは全く異なる。」<sup>7)</sup>と、反動文学、新ブルジョア文学と区別する一方、人生の諸問題の描写にのみ留まり、その原因を究明せず解決方向を与えない点を、「動きのみであり、どの方向へ動くかという決定がない。この様に決定もなく、あてもなく動いていると、前進が困難となるのみならず、後退さえ懸念される。……人民の生活問題を描写することは大変結構だ。だが、何故その問題が現われたのか、その問題にどう答えるかの二点を入れなければ、彼等の文学は、人間社会の困苦を見て泣き叫ぶも同然だ。」<sup>8)</sup>と批判し、「描写のみに満足せず一步前進すべきである。人民の解放と前進に指導的知恵を与える人、組織者へと成長すべきである。」<sup>9)</sup>と、共に行動することを呼びかける。

次に、写実文学作家への人民文学作家の対応の問題点を指摘する。ゾージー、ミントゥウンに対して、人民が楽しく生活する姿を描くべきではない、不自然だ、人民は抑圧され過ぎていて楽しくなど暮らせないと言う若手作家の批判を取り上げ、「その批判によれば、人民は常に泣いてばかりいなければならない。実際は、人民には楽しさと辛さ、元気さと弱々しさ、良い体験と良くない体験がある。それで初めて自然なのだ。文学界におけるゾージーとミントゥウンの欠点は、人民の楽しい側面を描いたことではない。人民が古い体制から解放されようと奮闘する有様を描けなかったことに他ならない。」<sup>10)</sup>と反論し、柔軟な対応を示す。ゾージー、ミントゥウンの積極的側面を評価し、同盟者と見なした点に、それ以前のテインパーミンからの変化が見られる。しかし「キッサン」という用語は登場せず、ビルマ文学史におけるキッサン文学の位置づけもまだ試みられてはいない。

キッサン文学は、口語的散文体の発展に貢献したが、文学運動として出発したのではない。出発点として、「キッサン小説集」「キッサン詩集」に作品が収録された作家達<sup>11)</sup>をキッサン作家、

彼等が各自思い思いに第二次大戦前迄書いた作品をキッサン文学と称したのは確かであるが、現代における厳密な定義は必ずしも一定ではない。例えば、キッサン作家の範疇に、ゾーギーは、ゾーギー、ミントゥウン、ティパンマウンワの3名を挙げ、継承者としてマウンティンとティンパーミンを挙げる。クタは、上記3名の他に、テッカトーマウンタンズィンとクタを挙げる。マウンティンは、1930年以降今日迄の全ての作家をキッサン作家とする<sup>12)</sup>。1930年から40年迄をキッサン文学時代と称する考えもあれば、<sup>13)</sup>キッサン文学を封建文学を打倒した文学革命と見なす作家もいる。<sup>14)</sup>

ティンパーミンは、キッサン文学がもてはやされていた当初から、それを一運動体としたり、一時代として区分することを疑問視した。<sup>15)</sup>「キッサン」という用語の使用を1940年代にも手控えた一因は、そこにある。

1966年1月、彼はボウタタウン紙コラム「キッサン文学なる指標を倒せ」で、広報局やサペバイマン社の如き国家的機関がキッサン文学を文学史上の指標と見なす傾向に再考を促し、三つの問題点を指摘した。第一に、キッサン文学は大学生の一部を基礎とした狭い領域の文学で、学外の広範な作家層とつながりがなかったこと、第二に、キッサン小説以外に名口語散文を書く作家がおり、キッサンのみが新しい文学だとは言えないこと、第三に、キッサン文学が人民と時代を反映すると言うが、学外作家の作品にその点でもより優れたものがあることを挙げ、「キッサン文学というビルマ文学上の小集団」が文学の発展に寄与したことは認めながらも過大評価を警戒した。「水位が高くてはじめて蓮が立派であるように、文学芸術を含む文化の進歩後退、時代的変遷は、人民の経済的政治的運命の上にある。」<sup>16)</sup>と、文学史上の指標を、政治経済上の指標に基づいて定めるべく論議を促した。文学の階級性を当然とする見方が一般的となった「社会主義」ビルマにおいて、彼は初めてキッサン文学の再検討という作業と対峙した。

自伝(2)「進歩的現代人テッポンジーティンパー」執筆中の1974年7月、ラングーン大学における公開文学討論会での彼の発言は、キッサン文学に対する彼の評価が定まったことを物語る。自伝(2)では、全12章中1章がキッサン文学に割かれた。キッサン散文の位置づけは、同時代の小説家として避けて通れぬ作業であった。ティンパーミンは、選者ウペーマウンティン自身が弟子の作品を特別優れて新しいものとして世に送ったのではない点を再確認した上で、キッサン文学を大学構内から発生した新しい文学と見ることに反対する。第一に、文学を大学の内と外に二分することが無意味だからである。国民中上流階層出身者が集中し、エリート養成教育を行なう植民地下の大学は、ただでさえ学外の大衆に遠い存在であるのに、文学までもわざわざ大学内を特別扱いする必要はないと彼は考える。第二に、新しい散文は、大学の外から発生したことを実証する。公用語である英語が社会に幅をきかせ、ビルマ語が僧院内部に追いやられたことが、ビルマ語散文に古典の影響が色濃く残った一因であった。口語散文の発展は、1920年の学生ストライキと、その後各地に開設されたナショナルスクールの登場を直接の契起とする。それと共に現われた散文作家ピーモーニン、ウポチャ、やや遅れて登場するタキン党創設者タキンバタウンの3名

を、ティンペーミンは近代散文の先覚者に挙げる。それに続くティパンマウンワは、キッサン作家を称する前の作品に、韻文との混合体や長文等、古典的散文の影響を留めている故に二番手にすぎないことを指摘する。従って「近代的散文の開始は、大学内部からではない。キッサン小説集に載った人々のみが始めたのではない。我が近代散文は、多数の大作家達が古きものに訣別して書いてきたものである。これは一つの水の流れなのだ。従って、ビルマ文学の一時代、もしくは時代の一段階を定めるならば、キッサン登場以前にビルマ文学の新時代が開始していたと言える。」<sup>17)</sup>

散文小説の文体的側面からキッサンの歴史的 position を定めて後、彼は、ティパンマウンワ、ゾーギー、ミントゥウンのいわゆるキッサン3人衆を批評する。3人のうちティパンマウンワに対する評価がことさら厳しい。ティパンマウンワの作品は、内容的には大旨国民生活を反映するが、「時折彼は小村の農民達に同情せず、無慈悲に見つめ、彼等のことを邪険に皮肉っぽく書くことがあった。作家の一人としては、彼等の側に立つべき筈であるのだから許せない。」<sup>18)</sup>と、タヤワディの乱を題材とした短編「叛徒の炎」(1933、10)を例にあげる。そこでは1930年の反英農民一揆タヤワディの乱が、首謀者サヤサンの魔力に魅せられた農民達がサヤサンの言うがままに踊らされ、英国側がやむを得ず弾圧したと解釈され、反乱の炎に酔う農民達の中で消火に苦労する一官吏の生活が描かれる。この短編は、高級官僚として地方勤務のかたわら作家として名声を博したティパンマウンワの官僚的立場を暴露したものとティンペーミンは考える。「彼の立場は国民の側ではない。植民地政府の側に他ならない。彼は役人根性に満ちている。」<sup>19)</sup>ティンペーミンは、ティパンマウンワの従来の評価が文体面中心で、こうした内容の一面が見落とされていることを指摘し、ティパンマウンワの反動的側面を認識することの必要性を主張する。「サヤサン革命が挫折した時、国民の合法的闘争形態としてドウバマーアシアヨンが登場した。ティパンマウンワは、その組織を党員達を描く時に、同様にこきおろし、揶揄し、悪意を持って描いた。そういう部分は毒だ。文体が優れていればいるほど、毒は効果を放つ。」<sup>20)</sup>と、優れた技法の陰に反動性が隠蔽される危険を指摘した。

ゾーギーの翻訳文体や詩に対して、ティンペーミンは好意的であるが、短編小説については、第一に、世界恐慌の農村への波及後に執筆されながら、作品の舞台は恐慌以前ののどかな農村でしかないこと、第二に、主人公が一般の人民を代表せず風変わりな人物ばかりであることにより、感動が薄れると批判する。

ミントゥウンの作品全体を覆う切なさ、哀しさに、ティンペーミンは反撥する反面、強く魅惑される。それは彼の心の中の情緒性を揺り動かす。「私は二重人格者の如く、一方では切なさを激しく批判し、他方、ミントゥウンの切ない文章を好きにならずにはいられない。たまたま執着する。私自身も切ないものを書いている。私の心では、激しいナショナリズムと若く柔軟な青年の心、芸術家の心が綱を引き合っているらしい。」<sup>21)</sup>彼は、詩人としてのミントゥウンを、高く評価する。短編については、ミントゥウンが恐慌の打撃を受けた農民達を通して時代と庶

民生活を描いた点を高く評価しながらも、それらの短編がその時代のみで終わったことを批判する。「ミントウウンの作品を読むと、のうのうとしていられない。彼の作品によって湧き起こる私の感動は激しい。だが、悲しいことに、そうした貧しい人民の生活を反映したミントウウンの作品は、その時代に始まり、その時代に終わったのである。」<sup>22)</sup>

キッサン文学の歴史的立場づけとテイパンマウンワの作品の再検討という二点は、従来のキッサン文学観の中では注目に値する。しかし、一方ゾーギー、ミントウウンへの評価から、1949年の写実文学批判が全く脱落するという新しい問題が生じる。人民の描写に終始し、問題の原因と解決方向を示さないというかつての批判は、どこに消えたのか。

### 3

1930年代から40年代に至るティンペーミンの作品の多くは、社会矛盾の根源と解決方法を示すというパターンを持った。解決への方向性は、植民地時代には植民地体制からの解放であり、独立直後は反ファシズム統一戦線の団結による新社会の建設であった。統一戦線の団結回復が不可能となり、ビルマ全土が内乱の巷と化して後暫くは、左翼勢力の統一と和平が作中で訴えられた。これらの中で数量的に最も多いのは、方向性の最も明確であった植民地時代の作品である。大戦中の空白期間をはさんで、1948年以後執筆速度は落ち、上述のパターンは1951年の短編「第三流の場所」ではば終りを告げる。ゾーギーの短編を、恐慌以降に執筆しながら恐慌以前ののどかさしか描かず感動を薄めると批判したティンペーミンが、有名な長編「東より陽の昇るが如く」を、内乱や紛争に揺れる1953—57年に執筆しながら、その背景は1936年から42年、独立闘争の高揚から統一戦線の芽生えという独立闘争のいわばよき時代でしかない。現時点の矛盾の根源と解決方向を明示していなければ、彼の言を借りると「感動が薄れる」筈ではなかったのか。

1950年代、独自のプログラムをかかげ政界復帰した彼は、挫折を重ねる。ビルマ社会の混迷の解決方向を捉えられないままに、忙しさも相まって創作から様々に遠ざかる。かつてのパターンが使用できなくなった彼は、小説の新しい方向を作り出さねばならなかった。写実文学批判の脱落は、彼の小説の新しい傾向と無関係ではない。

ティンペーミンの新しい傾向の第一は、民衆から遊離する知識人像が描かれる点にある。それは、「櫓の折れた漕ぎ手ゴエセイ」(1955、6発表)をはじめとして、独身の中年弁護士によって一人称で語られる短編4編に見られる。高額の仕事のみ引き受けるこの「高級弁護士」は自由で快適な生活を謳歌するが、時折、偶然庶民の生活に立ち入ることがある。悪の道に転落しそうになりながらも、どうにか堅気の商売を続けるゴエセイ夫婦にひかれた彼は、罪をきせられたゴエセイの夫の弁護に一肌脱ぐつもりになったが、夫婦は別々に行方をくらましてしまう。彼には、逆流を小舟で遡る二人が流れに沈まないよう祈ることしか残されない。謝礼に制限をつけ、世の荒波から庶民を救うことに扉を閉ざしていた彼の、偶然ではあれ庶民に尽くそうとする気持は、実践の機会を与えられない。



実践されなかった好意は、「助けられるなら助けて下さい」(1956、1)で諦めへと転化する。自称ヒューマニストで体罰反対論者の彼は、子供の教育や家族のあり方に興味を持つ。、独身生活が味気なくなると、同じ階層の友人親類宅を訪れ、自分には何の責任もないその家の子供達と交わり、ゆったりと気分を安めて、親達と子育て論議に花を咲かす。友人宅への途上、道端の貧しい家の前で、仕事の邪魔をしたと激しく幼女を折檻する若い母親の姿を目にして、彼は思わず女を問いつめる。夫に去られ、2人の幼児をかかえて働く女に同情し、夫から慰謝料をとる裁判を無料で請け合う。好意を女に押しつけた彼は、これで母と子の幸せのために一働きできると鼻が高い。だが女は事務所に姿を見せない。2週間後、彼が女の家を再訪すると、同じ幼女が寝る邪魔をしたと男から折檻されている。女は親戚の強い勧めで再婚していたのだ。親子の運のめぐりあわせなのだと悲し気な女の立場を、彼は思いやる包容力を持ち合わせない。好意が踏みにじられ、弁護士のプライドが傷つけられたことが口惜しく、もう一切かかわりたくない。その反面、事態をこの近隣の住民達に大声で説明し、「助けられるなら助けてくれ」と叫びたい衝動もある。だが彼は決心のつきかねるままに歩調を早め、気がつくとその地域をずっと離れた地点を歩いているのであった。もはや彼は気まぐれの好意も捨て、民衆の「無知」や「愚かさ」への憤りと諦めに支配されていく。「無知」で「愚か」な状態に追いつめられている庶民達の困苦の原因を、推し測る気概もない。民衆との訣別を決意させたこの作品は、何故か短編小説選集には収められていない。

彼に残された民衆との接点は好奇心のみとなる。「その彼女とバラスィートゥ」(1964.1)では、「社会主義」ビルマにおける弁護士の存在の可否が論じられる風潮の中で、仕事も暇になった彼が、町で見かけた娘の只ならぬ素振りに興味を持ち、サイカーで後をつける。娘は閨屋であり、サイカーの運転手は彼女を心配して遠くから見守る投降共産党員であった。弁護士は彼等の身の上を熱心に聞くが、彼等はいずれその脳裏から消えてゆく存在にすぎない。

「合法的放蕩者」(1966.1)では、彼は庶民の苦しみなど全く忘れている。「革命」政権下、弁護士の実業が一時憂慮されたが、相変わらず次々と事件があり、依頼人から金品が入り、生活は安定を回復した。家族の絆が煩わしく、独身を楽しむ彼は、女友達には事欠かないが、彼女達が結婚を迫ると、交際も煩わしくなる。売春も利用するが、世間の目や病気の伝染が恐ろしい。解決策は、新入りの女中を隠し女にすることである。娘の叔母を通して意向を打診するが、娘は意志表示をしない。同階層の女友達との交際に慣れた彼も、下層の人間の扱い方はわからない。無言で無表情な娘に業を煮やした彼が強行手段を取ろうとすると、娘は「罨の中の兎の眼」で抵抗を示し、何故か彼を圧倒する。数日後、バスで前に坐った見知らぬ娘の悲し気な様子を好奇心一杯に観察していた彼は、突然家の女中を思い出す。女中に対して、庶民の一員としての同情すら持たず、一匹の雌と見なしていたことに気づく。バスが止まった時、彼はそのまま乗って、娘を救ってやりたい気分に一瞬おそわれるが、バスを降り、散歩をしながら考える。合法的放蕩者となることをやめ、年令階層共に同等の相手を見つけて結婚しようと。10年余にわたる弁護士の物語

は、結婚の決意によって終る。「革命」政権下の特権階級の一員である彼には、暖い家庭が約束される。相変わらず困苦にあえぐ庶民との間は、ますます開いていく。弁護士は、ティンペーミンの分身ではなく、そのモラルも肯定されてはいないが、傍観者とならざるを得ないその立場は、ティンペーミン自身のそれをも反映するものではなかったか。

自伝(2)で、ミントウウンの優れた短編の筆が早期に折られたことについての、ティンペーミンとミントウウンのやりとりが、語られている。「これらを書き、彼は英国へ行った。英国でも書けなかった。英国から帰っても書けなかった。今日迄書けていない。彼は学者となってしまった。作家ではない。彼に会った時、私はこの通り述べた。昨日のことだ。彼も認めた。書けないそうだ。“人民と私は離れてしまった、私が時々入っていても昔のような彼等の感慨が得られない”と言う。‘アウンおじさんの驢つき’<sup>23)</sup>の頃のような感慨が得られないと言う。そういった感慨が得られないために書けないのは悲しいことだ。感慨を得るにはどうすればよいのかわからない。そうこうするうちに、我々も老いてしまった。」<sup>24)</sup>ミントウウンの書けない理由である民衆からの遊離は、ティンペーミン自身の問題でもあった。民衆の中に入り、その喜びや悲しみを深くつかむことができなくなった彼の筆は、どの階層の人々にも共通する感情である「人間の基本的思想」<sup>25)</sup>なるものに向けられる。

## 4

ティンペーミンの新しい傾向の第二は、中年及び老年の男性の心の惑いが描かれる点にある。これも又、短編のみである。「不合理なことよ」(1955.7)の「彼」は、理髪業をやめ、外人専用プールの雑役夫になる。同僚は分散して働き、客は彼を無視するので話し相手がいないのが悩みではあるが、プールに泳ぐ白人女性の肢体を見ることは楽しい。だがある夕方、一人の女性が殊更彼に親切な態度を示し、彼は仕事をしながら様々な妄想に耽ってしまう。妻が恋しくなる。その夜、育児に疲れ眠る妻の傍で、彼は脳裏からあの白人女性を追ひ払うことができない。翌日、彼は出勤したくない。彼女が来れば、仕事に手がつかなくなりそうだからだ。といって出勤しなければ生活に困る。「不合理なことよ」と呟きながら、彼はプールへと行進してゆく。植民地社会の遺物である美しい職場は、彼にとって地獄であり、美しくやさしい白人女性は、鬼女である。妄想で我が身を縛って悩む男の心理をユーモラスに示しながら、風刺の筆も名残りを留める。

中年男の心理描写中心であるが、心の惑いが重点ではない「完全浄化」(1955.9)で、ティンペーミンの風刺の筆は更に回復される。下級官吏コチョーは、当節流行の収賄にあまり関係のない立場にあるが故に、借金ずくめの貧しい生活を送っていたが、ある日うっかり賄賂を受け取り、直ちに摘発される。上部では巨額の金品が動いているのに、政府の「完全浄化キャンペーン」の見せしめには彼のような下っ端が格好の生け贄となる。解雇されると若い妻は去り、近所の人々の信用は落ち、付けで買い物もできなくなって、その日の食べ物にも事欠く有様だ。労働組合に訴えても、委員長が役所の上役ではもみ消されるのが落ちである。苦肉の策として首相へ

の直訴を試みるが、事の成否はわからない。解決方法は明示されないが、社会の腐敗を庶民の生活を通して告発したこの作品を最後として、ティンペーミンの筆は心の惑いの中に戻っていく。

「老教師の問題」(1959.6)は、老人の心の揺れを詳細かつ大胆に描写して物議をかもした。退官真近いランゲーン大学の老講師「私」は、若い教官が出世して立派な家に住んでいるのに、庭つきの家に住むため貯金に励み、つましく暮らす。初夏の朝、出勤途上の通りに咲きほこる花々の燃える美しさが彼の心に色とりどりの揺さぶりをかけた。大通りを自分1人が所有する快感に浸る彼は、やがて前方を行く娘の存在に気づき、少々気分を害する。が、気を取り直して娘の後を4、5歩離れて歩き、じっくり観察しはじめる。通りを吹きぬける風は娘の肉体にふれた後、彼の老いた体もやさしく包む。彼はいつしか、自分が背の高い髪黒々とした大学生となっているかのような錯覚に陥る。娘を前から観察したくなり歩調を速めて接近しながら、娘の肉体に触れてみたくなる。横に並んでしげしげ眺め、追い越してから道端の花を折るふりをして、その肉体の細部に視線を走らす。再び彼女の後を歩きながら、彼女を抱き、愛の言葉を交す自分を夢想する。だが、通りに姿を見せた青年によって、老人は現実の世界に引き戻される。若い2人は、はしゃぎながら歩み寄り、老人は再びのろのろと歩き出す。青年から挨拶されてやっと、それが自分の教え子であることに気づき、彼は自分の心が見すかされたかと危惧する。2人の微笑が自分への嘲笑に思え、いたたまれず、彼は再び歩調を速める。部屋に着くと、持病の膝が痛み、老いが身にしみる。彼は、年甲斐もなく興奮した理由を考える。自分自身が未熟であるのか。俗人全てに共通する業なのか。初夏の美と娘の美が重なって彼の老いた血を掻き立てたのか。寺で修業に勤しむ老妻が帰宅すれば、尋ねてみたい。青臭いことをと笑われるかもしれないが、彼にとっては大問題なのである。

このような類の「問題」を文学に取り上げるべきでないという批判が、ゾーギーを筆頭として上がった時、ティンペーミンは、老人の妄想を肯定はしてはいない、作家が抑制すべきでない人間の本性を描いたのだと反論した。<sup>26)</sup>これに対してマウンスンイーも、1976年、ティンペーミンの短編小説全体を批判する中で、「老教師の問題」によって作品の傾向が更に悪くなったと指摘し、「階級的視点はどこへいつてしまったのか。階級とかけ離れた人間の本性があるのか。」<sup>27)</sup>と追及した。

これに対するティンペーミンの反論はない。その批判の翌年、彼は「坐る場所を一つ見つけて」(1977.8)によって、更に中年男性の惑いを追及した。生活の苦しい下級官吏「彼」は、郊外に土地を買った。野菜を作って売るサイドビジネスで生活の安定を図るためである。将来は、そこに家を建て、妻子や義母と住むのが夢だ。その荒れ地を耕すため、彼は休日ごとに早朝から長時間バスに揺られて出かける。満員バスの中での彼の心の流れが主題である。前半の彼の関心事は座席の獲得である。彼の視線は乗客の表情に集中し、途中で下車しそうな客を物色する。広い座席を独占する男に注意をして車掌に感謝された彼は、車掌から空きそうな席を教えられその傍に立つという幸運をつかむ。後半は、座席獲得による彼の心の変化が描かれる。彼は、余裕を持って

ゆったりと車の内外を視察する。窓の外の積み残された女性達への同情も、坐っているからこそ湧きおこる感情である。やがて彼は、立っている女性客に視線を移す。彼女達は身をささえるのにせいっぱいだが、彼は眼前に迫る女性達の肉体について妄想する他になすすべもない。空想の世界に入りこんでいる彼に、車掌が彼の降りる駅を通過したことを告げる。あれほど渴望した坐席獲得の結果、得たものは安らぎではなく妙な疲労感であった。何才になっても人の心は猿の様に跳ねるものかと、彼は今更ながら自分の心の揺れに驚く。2マイル余分に歩くことになった彼は、たちまち我に帰り、荒れ地に向って辛抱強く歩き出す。

中年から老年にかけて、つましい家庭生活を送る善良な一市民が、何故かふと落ち込む心の惑い。「不合理なことよ」においては、それは生活の敵であった。それから解放されるには、仕事そのものを捨て、路頭に迷わねばならない。しかし「老教師の問題」におけるそれは、生活上の障害とはならない。ただ老いの身に足腰の痛みという産物をもたらすのみだ。「坐る場所を一つ見つけて」のそれは、むしろユーモラスである。男は老教師のように惑いの原因を深刻に考えない。座席の獲得と共に生じた惑いは座席を手放すことにより直ちに消え去る。疲労という副産物からも立ち直り、彼の心は次の仕事に支配される。ティンペーミンの短編における男達の惑いは、年と共に深刻でないもの、特別でないものとして扱われていった。

## 5

細部の描写に研ぎ澄まされていくティンペーミンの筆は、随想風私小説によって幕を閉じた。これが、新しい傾向の第三である。それらは大旨、第一に社会的政治的背景が皆無であり、第二にテーマ、舞台、登場人物は作者自身の周辺からもたらされ、第三に作者の一人称で語られ筋の起伏がないという特徴を持つ。これらの小説は、さらに、家庭、家族の問題を題材にしたものと、自然の摂理への感慨を題材としたものに分けられる。前者は、短編「シントゥマナ」(1958.6)で長男の得度式を、短編「ティッサことセイネッ」(1966.11)で飼犬の結婚問題を、長編「彼等夫婦の34年」(1976.9)<sup>28)</sup>で召使い夫婦の歩みを、長編「老夫婦より生まれいつる愛」(1977.8)<sup>29)</sup>で初孫の誕生を描きながら、ティンペーミン独特の結婚観、教育観、家庭観ならびに日常的感慨が語られる。<sup>30)</sup>

後者は、彼の死の1、2年前に始まった傾向である。「美よ今日はお前に会えなかったのか」(1976.5)の「私」は作者と同一人物である。1975年初秋の早朝、まだ薄暗いマンダレイの路上、徐々に活気づく町の情景には目もくれず、彼はひたすら歩いている。彼は、前日偶然目にした昇りゆく朝日の神々しいばかりの美にもう一度出会おうと、前日と同時刻に出発して同地点に向かうのだ。しかし、同じ状況にもかかわらず同じ美しさは見られない。彼は落胆のあまり心も虚ろとなる。他のどんな美も彼の心を満たさない。作家である彼にできるのは、それらを文につづることではないが、いくら書いてみてたところで「一人の作家の美の創造能力は、母なる自然の美の創造能力に追いつけそうもない。」<sup>31)</sup>と、自然の偉大さを思い知る。

「翼ある花」(1976.11) も同じく1975年末のある夜、部屋に飛んでくる様々な虫を観察するうちに「私」は、美しい大きな蝶のつがいを発見する。蝶を「翼ある花」に例えた古典詩を思い出し、詩情に酔う。だが楽しさは、束の間である。つがいの一方が、壁の美人画に寄っていくうちに、額の後にひそむ醜悪なやもりに捕えられたのだ。美しい絵の裏で展開する残酷な自然の摂理に胸は痛むが、生きとし生けるものは、食物を食べずには生きていけない。眠れぬ夜を過ごした翌朝、もう一方の蝶が外傷もなく死んでいた。伴侶を亡くしたことによる悲嘆の死であろうと、彼はその亡きがらを飾り棚におさめる。蝶の生と死が克明に観察される中で前作同様、人為では如何ともし難い自然の法則が語られる。飾り棚のガラスのむこうの先客達は象徴的である。まず、仏像は礼拝用ではなく鑑賞用である。合理主義的、個人主義的仏教徒である彼は、一般のビルマ人と異なり、家に仏壇すら置かない。外遊土産のワシントン像、マルクス像は、元政治家ティンペーミンの名残りを示す。文学者として政治家として、彼が尊敬した唯一の人物、タキンコドフマイン像、非業の死を遂げた独立の父、アウンサン像は、彼が青春を燃焼させた独立闘争の名残りというべきか。そして、生きざま死にざまをありありと展開して見せた小さな生物、翼ある花は、彼のもっぱらの関心事が天下国家を離れ、日常的な自然の営みにあることを示している。

「青龍木が黄金に濡れる時」(1977.7) は、ビルマ暦の古い年が去り、新年を迎える4月の躍動を抒情的に謳歌する。1年中で最も詩人の魂が活躍するのみならず国民全体が浮き立つこの時期、中でも人々を高揚させるのは、青龍木開花の知らせである。妻を亡くし、子供も独立した孤独な「彼」も、この日ばかりは、寝床にこもってはられない。人々は町に出て花の香に酔い、枝を折り、花を髪にさす。花をかかえた僧侶、花を持ち帰った父を取り囲む子供達、町は人々と花に溢れる。人混みに疲れた彼は、とりとめもなく考える。他に色香の良い花があるのに、人々はなぜ青龍木を好むのか。1年に一度しか開花しないからか。新しい年の前兆であるからか。考えるうちに、亡妻や子供達が殊更懐かしい。人生に最早何も残されていない男にとって、青龍木は何になろう。考えるほどに彼は混乱し、疲れ果ててぼんやり花を見る。彼は作者の分身ではないが、浮き立つ初夏のビルマと孤独な老人の対比は、何人にもやがて必ず訪れる老いの淋しさを浮き彫りにする。ふんだんに使われる古典詩の引用が、作品に抒情性を添える。政治性の陰に眠っていたティンペーミンの情緒的側面が、この3編によって開花しつつあったと言えよう。

6

ティンペーミンは、戦後、小説よりも紀行、評論等のノンフィクションを多く執筆した。晩年に近づくに従って小説そのものがエッセイ風になり、ノンフィクションとの差が明確ではなくなっていた。ティンペーミンのエッセイには定評がある。ゾーギーは、ビルマにおけるエッセイがここ50年の間に詩や小説と並ぶ文学の一ジャンルとして確立したと述べ、ビルマの代表的エッセイ数篇の中に、ティンペーミンと共にティンパンマウンワの作品を挙げている。<sup>32)</sup>

ティンパンマウンワの短編小説にもエッセイ的要素がある。任地先における見聞を題材にした作品の多くには、作者の半ば分身と見られる官吏が主人公として登場する。彼は、経済的に安定した暮らしを穏やかに営む独身男であることが多く、時折毎日の生活にけだるさや物憂さを感じるが、それらをつきつめて考えようとはしない。庶民の生活を観察し、のどかさの中に安息を求め、古い建造物や大自然の中に無常を感じる。人間も、移り変わる自然の一部である以上、じたばたしても仕方がないという一種の悟りの境地に達して、洗練された簡潔な文体で日常をみつめる。ティンパーミンは、ティンパンマウンワの作品の一部に見られる民衆蔑視の反動性を批判したが、国民生活の日常を詳細に描写しながら、その立場の故に真に民衆の側に立ち切れなかったティンパンマウンワの作品に、ティンパーミンの晩年の作品が似かよった一面を見せたことは皮肉である。

政界での挫折に伴って作品傾向も変化した1950年代を越すと、ティンパーミンは一種の悟りを身につけるようになる。1964年、彼は生と死に言及する。「人生に満足している私は死も怖れない。生も怖れない。50才を迎え満足して生きている。死なば死なしめよ。惜しくも怖くもない。満足して生き、今後も満足して生きるであろうと信じている故、生きようとも喜ばしく生きるだけだ。」<sup>33)</sup>彼は来世を信じない。死によって精神肉体共に消滅すれば、それらを有効に活用するため、体を灰として故郷の土に投じ、そこから生じた植物が実を結んで生きとし生ける者の糧となることを願う。寿命がさらに与えられたなら、「人類の安定と進歩のために、これまで必要な全ての闘争に参加してきた如く、これからも参加するのみである。」<sup>34)</sup>ただし、闘争の内容は、かつて政治から文学へと広範であったが、以後文学芸術の領域に専念することを宣言する。

だが、創作力の低下による長編「ティーターピョン」の不評<sup>35)</sup>は、彼をさらに新しい傾向に向かわせた。人民から遊離し、心理描写の中に入り込み、日常の細部を随想風に描写し、その筆は、かつて彼が一線を画したキッサン作家の作風をも無意識のうちに包括した。そしてさらに、厳密な観察による写実性に抒情性という新しい側面を加えて、従来なかった詩的な散文を切り開く過程にあった。1949年の写実文学批判がこれら新しい作品の傾向の否定につながることを誰よりも知っていたのは、ティンパーミン自身ではなかったか。作品の新しい傾向を肯定するために、彼は写実文学批判を覆い隠しつつキッサン文学に評価を与えることを余儀なくされたのであった。この変貌について明確な釈明のないまま、彼は予期せぬ死の訪れに64才の生涯を終えたのである。

#### <注>

- 1) 拙稿：『小世界の「自由」—ティン・ペー・ミン最後の小説の意味—』—外国語外国文学研究2—1978、大阪外国語大学大学院修士会。ここで使用した「社会文学」という語は、本稿の「写実文学」と同じ、'pyidhu thayoukpya sapay'の便宜上の和訳で、直訳すれば「人民描写文学」となる。
- 2) Thein Pe Myint : 'Chaukhse Kyawhma Yedhaw Wuttumya 1978.10, Rangoon
- 3) Malihka : 'Myanma Sapay Abeidan (1)' 1975, Rangoon, p.195

- 4) Thein Pe Myint : 'Tet Hkit Tet Lu Tet Pongyi Thein Pe' 1975, Rangoon, p.92
- 5) Thein Pe Myint : 'Saya Lun Attoukpatti' 1974, Rangoon, 第4版, p.22
- 6) Thein Pe Myint : 'Hkitkyia Naukpyanswenedhaw Sayesayamya'—Thein Pe Myint Sabaungzu Sapay Webanye—1971, Rangoon, p.22
- 7) Thein Pe Myint : 'Yane Pyidhusapay Atwedwe Pyatthana'—Thein Pe Myint Sabaungzu Sapay Webanye—p.48
- 8) 同上, p.51
- 9) 同上, p.51
- 10) 同上, p.53
- 11) それらは、ウセインティン (ティパンマウンワ) <1899—1942>、ウティンハン (ゾーギー) <1908—>、ウウン (ミントウウン) <1909—> (前本学客員教授) の3名の他、ウエマウン、ウトアウン、ウニョン、ドキンソーム、ウソーマウンマウン、ウバタウンの計9名である。
- 12) Than Htut : 'Theippan Maung Wa hnit Hkit San Sapay'—Sapay Sadanmya—1967, 3. Mandalay, p.78—79
- 13) Thonbuinsaing : 'Hkit San Sapay' 1962, Rangoon, 第3版序文
- 14) Dagon Taya : 'Sapaydhit'—Dagon Taya Sapay Thabawtaya Sapay Webanye Hloukshahmu—1967, 8. Rangoon, p.138
- 15) Thein Pe Myint : 'Sapay Swenwebwe' 1975, Rangoon, p.13
- 16) Thein Pe Myint : 'Hkit San Sapay hudho Hmattaing go Hlepityan'—Thein Pe Myint Sabaungzu Sapay Webanye—1971, Rangoon, p.286
- 17) 'Sapay Swenwebwe' p.19
- 19) 'Tet Hkit Tet Lu Tet Pongyi Thein Pe' p.110
- 19) 同上, p.111
- 20) 'Sapay Swenwebew' p.24
- 21) 'Tet Hkit Tet Lu Tet Pongyi Thein Pe' p.123
- 22) 同上, p.128
- 22) 貧しい少年の悲しみを描いた、ミントウウンの短編小説
- 24) 'Sapay Swenwebwe' p.27
- 25) Thein Pe Myint : 'Achitsit Achithman hnit Pattheywe'—Shumawa vol.31 No.370—1978. 3 Rangoon p.40
- 26) Thein Pe Myint : 'Dabaung Oza hnit Sayao Pythana'—Wuttudobaunggyout—1966, Rangoon, p.603—604
- 27) Maung Sun Yii : 'U Thein Pe Myint i Wuttudobaunggyout Webanye'—Bamaza Bale Bele—1976.10, Rangoon, p.127
- 28) 執筆時。発表は1977年4月。
- 29) 執筆時。発表は1977年11月12月。
- 30) これらについては拙稿「小世界の自由—テイン・ペー・ミン最後の小説の意味—」に詳説
- 31) Thein Pe Myint : 'Yane Min hnit Matwetyabagala Ahlaye'—Chaukse Kyawhma Yedho Wuttumya—1978.10 Rangoon, p.20
- 32) U Thein Han : 'Myanma Zagabye'—Myanmahnu (I)—1975. 1, Rangoon, p.39
- 33) Thein Pe Myint : 'Theye Neye Abeidama'—Taikpwewin Samya—1968, Rangoon, p.285
- 34) 同上, p.288
- 35) これについては拙稿「テインペーミンの小説における女性像のゆくえ」大阪外国語大学学報第47号1980 p.23—26に詳説